

## 口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台  
地域火山監視・警報センター  
鹿児島地方气象台

＜噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ＞

口永良部島では、主に古岳付近の浅いところを震源とする火山性地震が7月30日から31日にかけて一時的に増加しました。8月1日以降は、新岳火口付近及び古岳付近の火山性地震はいずれも概ね少ない状態で経過しています。その他の観測項目では、火山活動の高まりを示す変化は認められません。

新岳火口周辺に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなったと判断し、本日（1日）11時00分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

### 【防災上の警戒事項等】

活火山であることから、新岳火口内、西側割れ目付近では、高温の噴気や火山ガス等に注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

### ○ 活動概況

口永良部島では火山性地震は3月下旬以降、概ね少ない状態で経過していましたが、主に古岳付近の浅いところを震源とする火山性地震が7月30日から31日にかけて一時的に増加しました。8月1日以降、新岳火口付近及び古岳付近の火山性地震はいずれも概ね少ない状態で経過しています。

噴煙の状況に変化はみられず、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、8月は1日あたり10トンと少ない状態で、検出限界を下回る日もみられました（7月：10～30トン）。

8月16日から17日に山麓から実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近及び古岳火口東側で引き続き地熱域を確認しましたが、7月の火山性地震の増加前の観測（6月8日から9日）と比べて温度や広がりには特段の変化は認められませんでした。

GNSS連続観測では、2021年2月頃からみられていた基線の縮みは同年5月頃より停滞しています。

以上のことから、新岳火口周辺に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなったと考えられます。

---

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ (<https://www.data.jma.go.jp/fukuoka/index.html>) や気象庁ホームページ ([https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)) でも閲覧することができます。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。

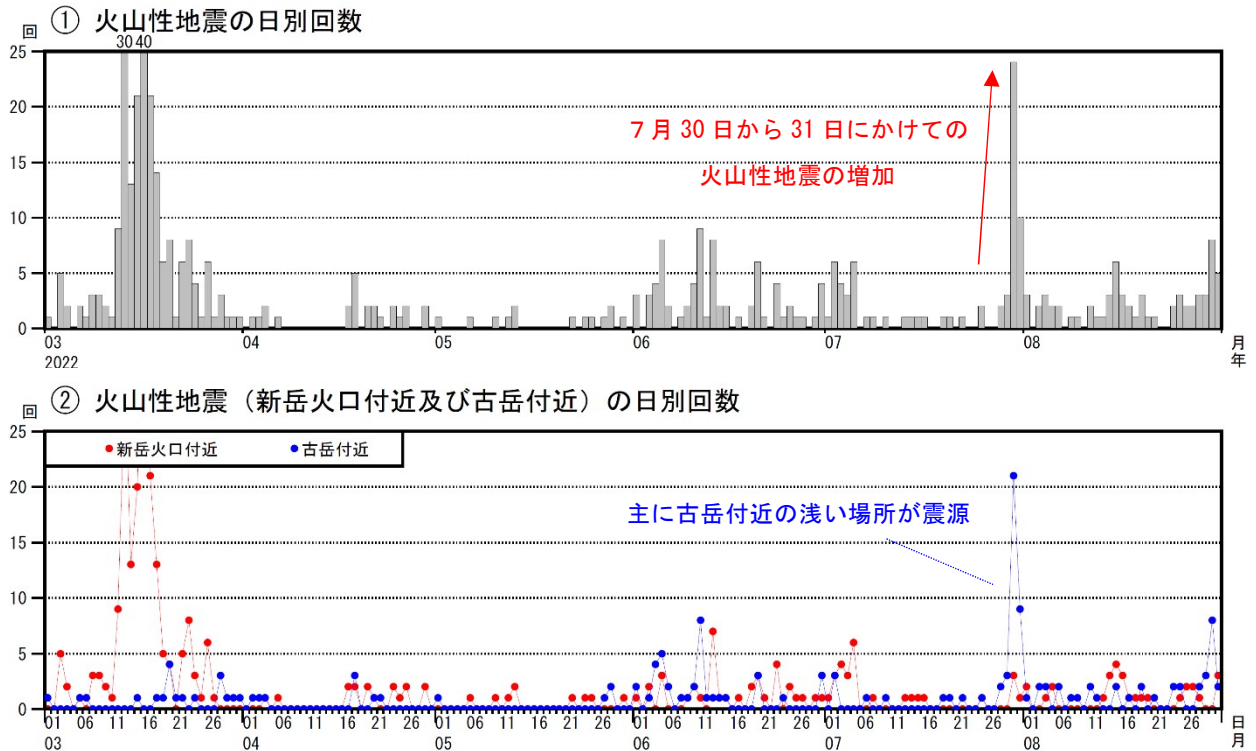


図1 口永良部島 火山性地震の日別回数（2022年3月1日～8月31日）

火山性地震は3月下旬以降、概ね少ない状態で経過していましたが、主に古岳付近の浅いところを震源とする火山性地震が7月30日から31日にかけて一時的に増加しました。8月1日以降、新岳火口付近及び古岳付近の火山性地震はいずれも概ね少ない状態で経過しています。

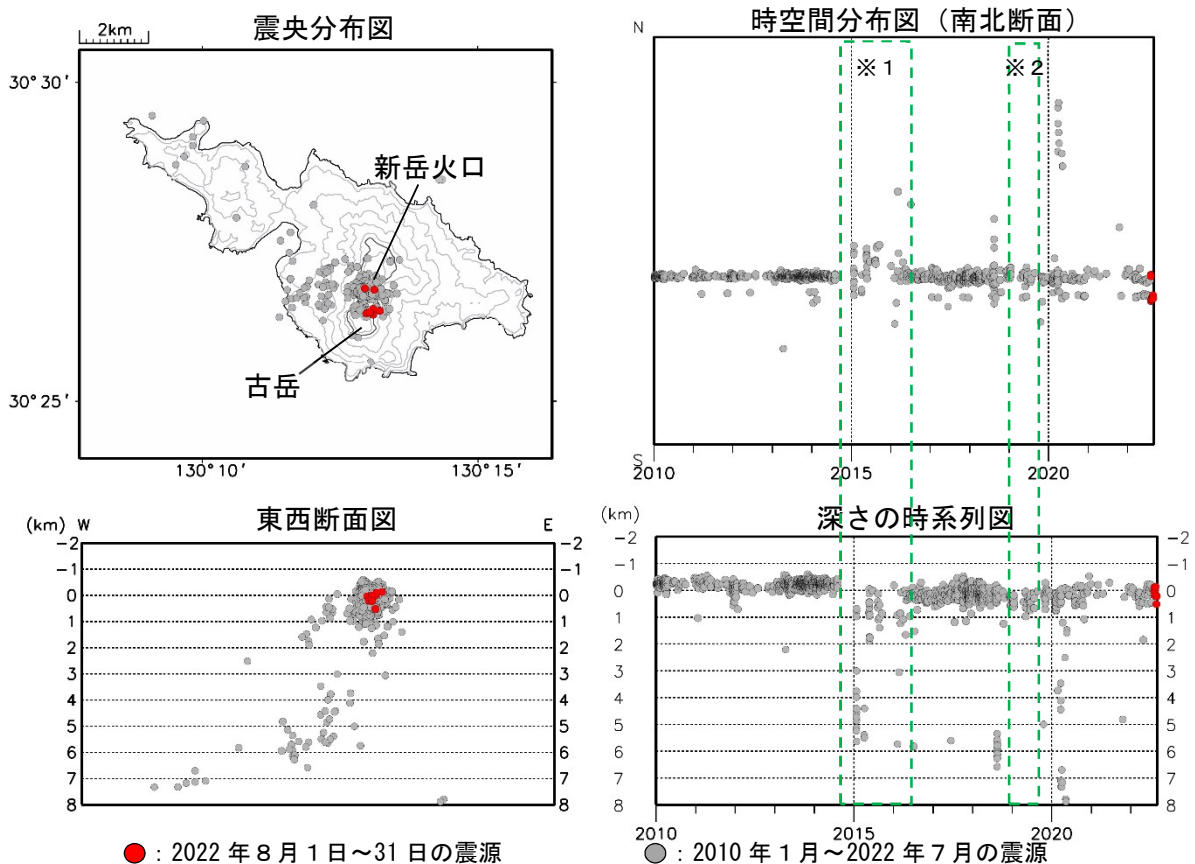


図2 口永良部島 震源分布図（2010年1月1日～2022年8月31日）

震源が求まった火山性地震は、新岳火口及び古岳付近の深さ0～1km付近に分布しました。

観測点の障害等により、検知力や震源の精度が低下する場合があります。

※1 2014年8月3日の噴火 ※2 2019年1月17日の噴火による障害

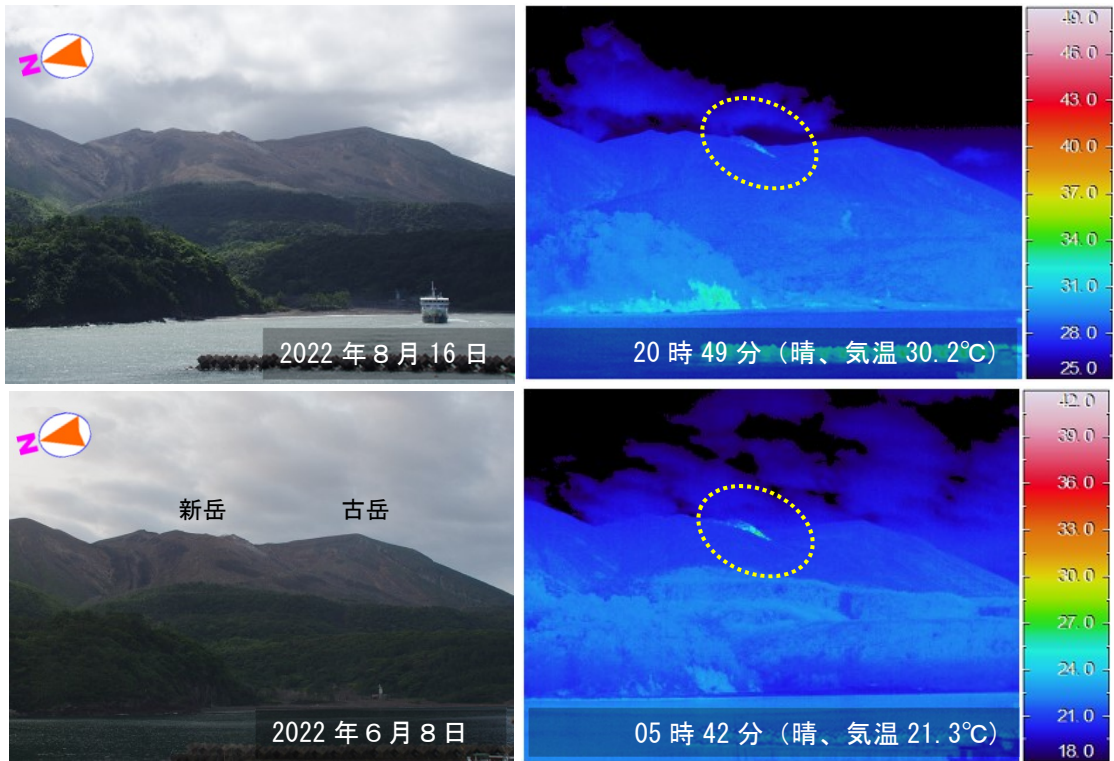


図 3-1 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（本村から観測）

8月16日に山麓から実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近で引き続き地熱域（黄破線内）を確認しました。7月の火山性地震の増加前の観測（6月8日）と比べて温度や広がりには特段の変化は認められませんでした。

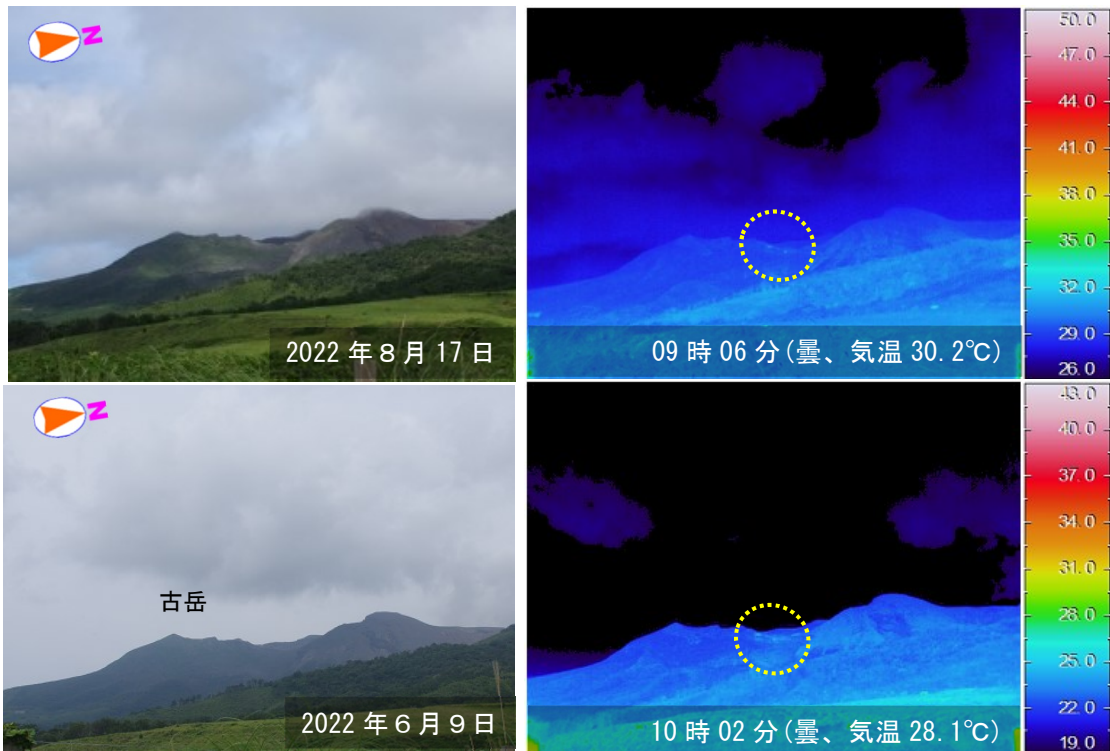


図 3-2 口永良部島 古岳東側付近の状況（湯向牧場から観測）

8月17日に山麓から実施した現地調査では、古岳火口東側付近で引き続き地熱域（黄破線内）を確認しました。7月の火山性地震の増加前の観測（6月9日）と比べて温度や広がりには特段の変化は認められませんでした。

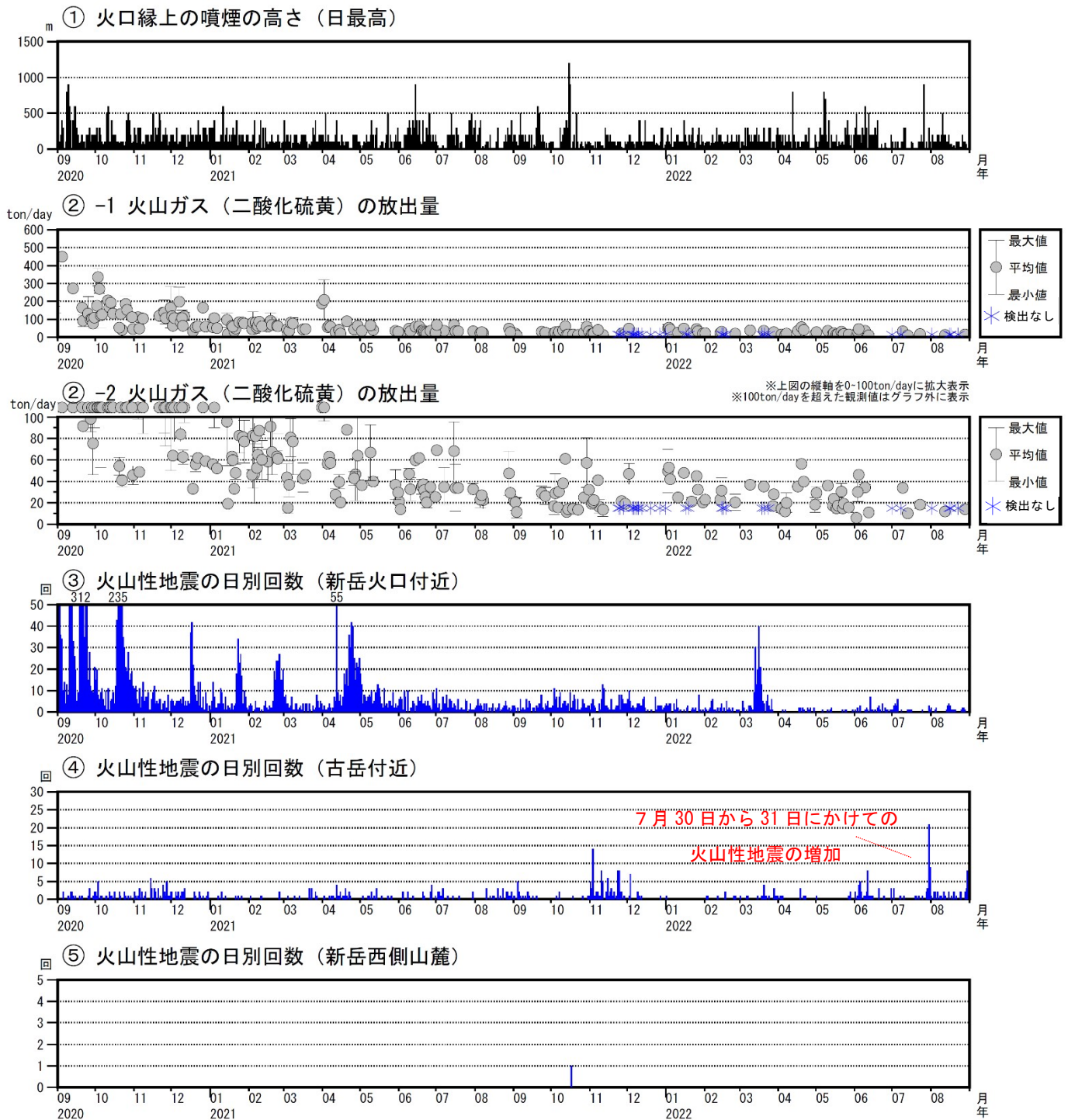


図4 口永良部島 最近の火山活動経過図（2020年9月～2022年8月31日）

- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、8月は1日あたり10トンと少ない状態で、検出限界を下回る日もみられました（7月：10～30トン）。
- ・火山性地震は3月下旬以降、概ね少ない状態で経過していましたが、主に古岳付近の浅いところを震源とする火山性地震が7月30日から31日にかけて一時的に増加しました。8月1日以降、新岳火口付近及び古岳付近の火山性地震はいずれも概ね少ない状態で経過しています。
- ・新岳西側山麓の地震は2021年10月18日以降、火山性微動は2021年11月16日以降観測されていません。

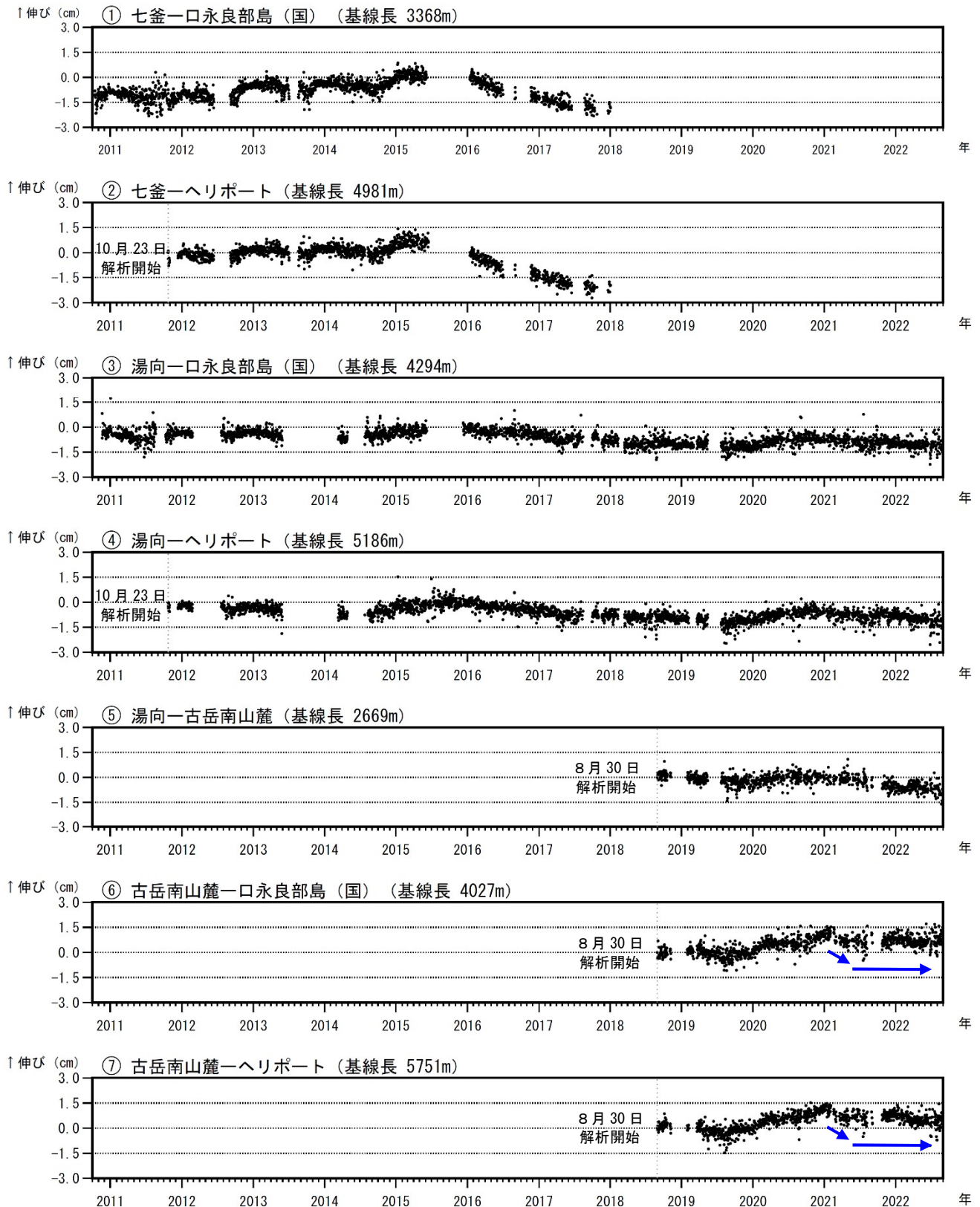


図5 口永良部島 GNSS連続観測による基線長変化(2010年10月~2022年8月30日)

GNSS連続観測では、2021年2月頃からみられていた基線の縮みは同年5月頃より停滞しています。

これらの基線は図6の①~⑦に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

(国)：国土地理院

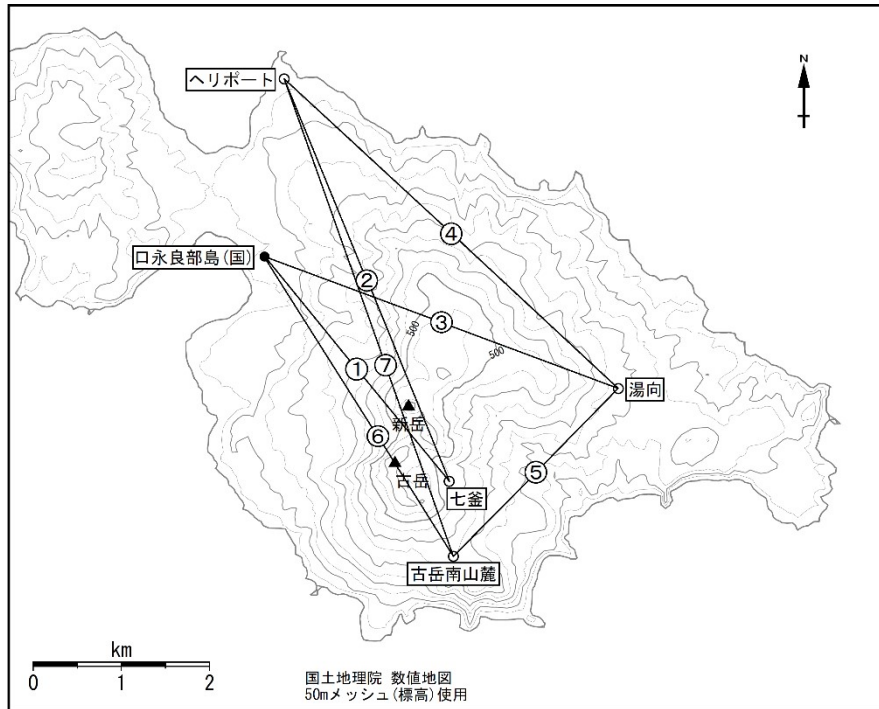


図6 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院

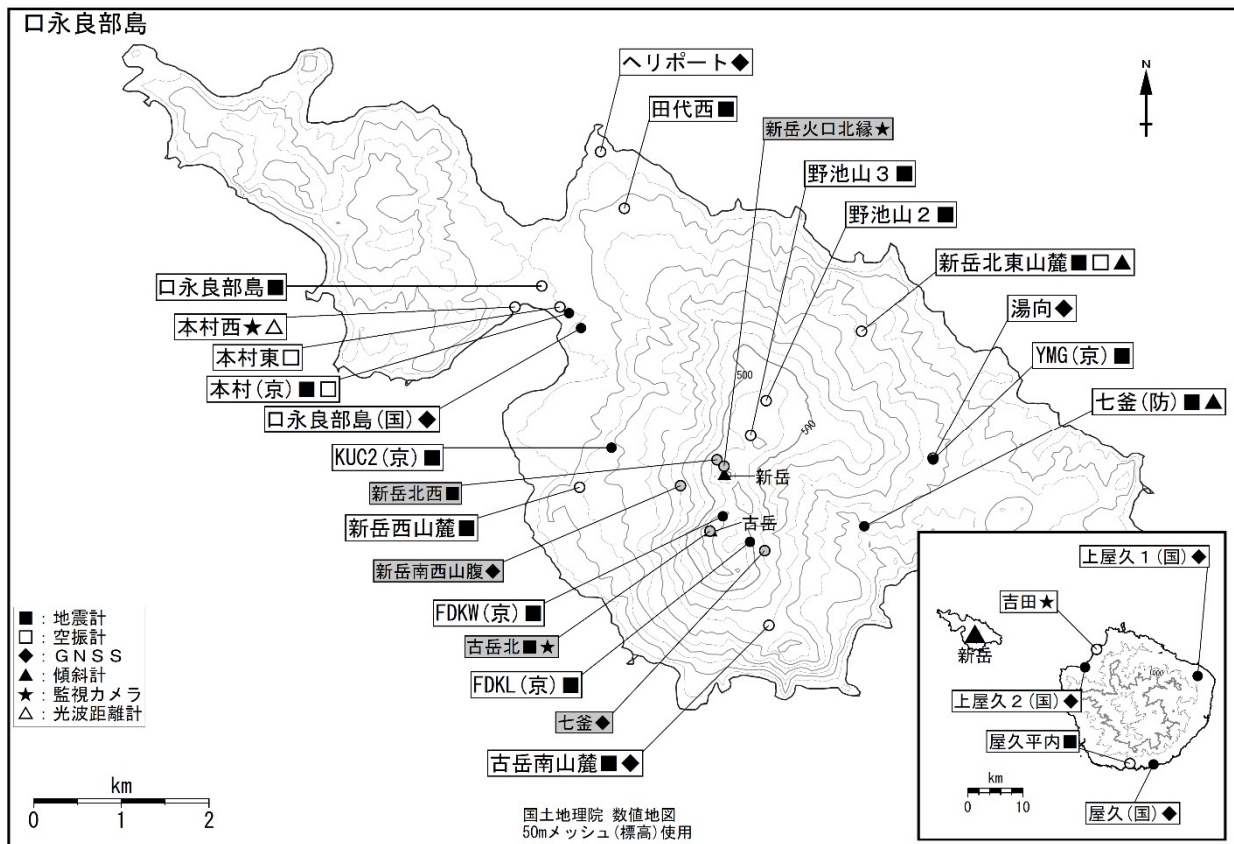


図7 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院、(京)：京都大学、(防)：防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。